

地形と建築のアマルガム (amalgam)

1956年に私は、神奈川県葉山で生まれ、都市的な環境というよりも海のそばの自然環境の中で育った。1975年から82年まで東京大学で建築学を専攻し、修士課程では槇文彦のもとで建築及び都市デザインを学んだ。1984年にはイエール大学で建築学修士(M.A.)を取得し帰国後アトリエを東京に設立した。

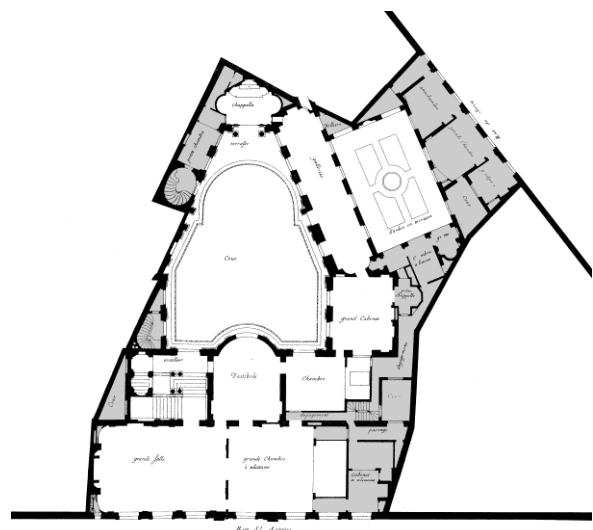
当初の私の建築上の関心は、都市の認識のメカニズムや、都市における地 (ground) の構築といったテーマだった。一方実際の建築物は、伊豆諸島などでの自然環境の中での仕事が多かったために、都市環境と自然環境の双方に対する認識モデルと、それらの地 (ground) に対する造形理念が相関性を持つようになった。

それまでは当然両者は、相反する対極的な2つの系であると考えていたが、一個の完結した生命体としてのツリー構造を持つ系として捉えるのではなく、リゾームやコラージュといった多数多様性としての認識モデルを持つようになってから、都市と自然のイメージは、丁度ヘッドフォーンの2つのマイクのように次第に接近するようになった。また「ノリの図」(図1)にみられるような建築と建築のアマルガムに基づく、都市の地 (ground) のイメージは、建築と地形のアマルガムとしての自然環境における地 (ground) のイメージを換気するようになり、双方に共通する変形可能なメディアとしての“環境体”の概念が形成された。

そもそも建築は、空間と呼ばれる“気体”とコンクリートや鉄鋼の柱や壁といった“固体”から成り立っている。これらにはミースのユニヴァーサル・スペースやロシア構成主義といった建築理念が込められたりもする事から、単なる物理的な“物質”というよりも、それに至る前段階に登場する“概念物質”とでも呼べるようなものとする事が出来る。



(図1)



(図2)

ところでこうした建築理念を宿すミディアムとしての概念物質の“気体”と“固体”を考える時、また物質の三体としての気体・液体・固体を想起するとき、20世紀の建築には、左記の“アマルガム”にみられるような、概念物質としての“液体”の概念が著しく欠落していたのではないかと考えるようになった。

その理由の一つは、20世紀の初頭に登場し20世紀に支配的であったモダニズムが置き去りにした部分つまりそれ以前の建築の中にこうした概念の多くが見出されることだ。例えば廃墟、城郭建築、ポシェを伴った或る種の古典主義建築物のプラン(図2)やNolliの図といった古典的事例の中に、それぞれ時間と空間のアマルガムが断片的にはあるが見出されるからだ。

もうひとつの理由は、20世紀のモダニズムが持っていた“場”からの遊離又は自立的な趨勢にも関係しているように思う。工場のプラントのように、周辺環境とは独立し、内的な自立性によって普遍性を獲得しようとしたところに、こうした既存の都市環境や周辺の自然環境との物理的なつながりを持つために必要な概念の発達が進まなかったとも考えられる。

愛知万博日本政府原案(竹山聖氏らと協同)(図3)では、海上の森に跡地利用計画として予定されていた従来型の2000戸6000人の住宅開発をストップさせる為に、それらの容積を二本の道路間に収容し、アマルガム化された変形可能な環境体として、第二の地形を作り出そうと試みている。

京都市西京極スイミングプールコンプレックス(仙田満氏と協同)(図4)では、メインプール下部の地下部分機械室の建設により発生する約9万平米の残土を極力敷地内で処理し、ランドスケープと建築の一体化を計っている。

唐が原のアトリエも含めたこうした一連の計画を通じて私は、形象の自己変形、周辺環境との融合性、場の創出といった建築自体の能力を高めたいと考えた。

21世紀の建築は、“場”の破壊者としてではなく、その創造者としての再出発をしなければならないことは言うまでもない。私はこうしたアマルガム化された環境体にみられる新たな概念物質の存在を20世紀の蓄積に導入することによって、場の創造者としての建築を目指していきたいと考えている。



(図3)



(図4)